
黄龍妖魔学園 黄色い龍は強かった

frost

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄龍妖魔学園 黄色い龍は強かった

【Nコード】

N7190R

【作者名】

frost

【あらすじ】

緋勇龍麻は、東京での戦いを終え、世界を漂流していた。たまたま立ち寄ったエジプトで、人とぶつかる。

そこから緋勇の宿命が発動した。

九龍妖魔学園紀の二週目の黄色い彼が頑張るお話です！

東京魔人の知識があると分かりやすいかもです。

基本この小説の構成は

本編と本編補完（緋勇以外のキャラ視点）で構成されています。

勘違いからのトレハン（前書き）

だいぶ改変しました。

勘違いからのトレハン

「おぬし、ロゼッタのトレジャーハンターじゃな？」

「いいえ、違います」

「さすが、トレジャーハンターじゃ。相手に身分を悟られないようにする。大切なことじゃ」

そんな決めつけられても困る。はつきりいつて……

人違いなんですけど！

俺……ひめうたつま緋勇龍麻はエジプトにいた。

何故かって？そりゃ親友に会うために中国に行く予定だった。

というか、中国に行った後日本に戻るつもりだった。

最近会っていない友達に会いに行くためだ。

親友に会いに行くなんてことか？というか、日本にくるなんてお告げなのか……

中国へ行こうとしたら、

電車に乗れば大幅なダイヤの乱れ

バスに乗ればバスジャック

徒歩にすれば目の前で盗人。

電車は致し方がないとあきらめ、

心優しい俺はバスジャックと盗人はちゃんと捕まえた。

こんなに心優しいのに……

飛行場へと着いたら

エジプト経由の中国行きしかない。

そこまでは、許そう。心の広い俺は許してやろう。

なのに……エジプトに着いたときに

「申し訳ございません。飛行機のトラブルにより本日は中国行きは全便欠航です」

「えっ？」

「大変申し訳ございません。ホテルの準備は出来ておりますので、本日はそちらでお休みになっていただいて、明日またこちらの方に来てください」

ようするに飛行機直るまでホテルで休めや！って事ですな。

仕方が無いから、親友への土産を買うことにする。

どうしようかな。なんて考えていた。

そのときにどこかの誰かが、ハント？っていう機械を落として、それを拾ってしまったのが、勘違いの始まり。

あれよあれよといううちに、トレジャーハンターとかいう仕事についてしまった。

モンスターに八つ当たりしつつ、最深部までできてしまった。

あれ？

こんなつもりでは……ちょっと昔思ってたやってしまった。

あそこの洞窟は一番下というものが存在しないから、階をカンストした時点でやめたけど……

イシスの碑文をゲット

俺、宝探しの才能あるんじゃない？

でも、銃とか嫌いだから……

やめよ……

そう思いなおす龍麻

そう、緋勇龍麻は何故かトレジャーハンターをやっていた。

「しかし、おぬし筋がいいのお」

「えっ?？」

「トレジャーハンター宝探し屋としての才能があるわい」

「いいえ、人違いです」

「謙遜しよって……」

宝探し屋とは 老商サラーの場合（前書き）

第一話の視点が違う人になります。

題名から分かるよう、サラー視点です。

宝探し屋とは 老商サラーの場合

そろそろ合流できるころじゃな。

サラーは商人であつた。

時々遺跡の案内もする。

それに、サラーは人を見る目があつた。

パートナーである宝探し屋がどこまでいけるかを予想する力があつた。

それは、遺跡で生き残るには絶対必要な力である。

サラーの忠告を聞かず行ってしまったものは、誰一人帰ってこなかった。

今回はどんな人が来るのか。

トレジャーハンター
宝探し屋の情報はもらえない。

トレジャーハンター
宝探し屋を総括する集団ロゼッタ協会が新人の宝探し屋を一人送るという情報だけ。

あとは集合場所とどこの遺跡に下りて欲しいという依頼だけ。

宝探し屋かそうじゃないかを判断する材料としてH・A・N・Tハントを持っているかどうかだった。

それに、追われているという話を聞いた。

秘宝を狙う輩は沢山いる。

ロゼッタ協会から派遣されるという新人宝探し屋
トレジャーハンター
はやくみつけてやらねば……

サラーは集合場所へと急いだ。

集合場所には、H・A・N・Tハントを持って待っている人がいた。
近くには黒い服を着た男たちもいる。

サラーは急いで、その人を呼んだ。

「おい！こつちじゃ！」

その青年はサラーを見るなり驚いている。

「おぬしがロゼッタ協会から派遣されてきた宝探し屋じゃな？」
トレジャーハンター
「いいえ違います」

青年が即答したところを見て、サラーは思わず関心してしまった。
息子と同じ位の青年のプロ意識に。

「さすが、宝探し屋じゃ。トレジャーハンター相手に身分を悟られないようにする。大切なことじゃ。しかし儂の目は誤魔化せんぞ」

「えっ？」

青年が驚いているように見えるが、儂は青年に対して見事な推理力を披露した。

「おぬしの持っている端末はH・A・N・Tハントといってロゼッタ協会トレジャーハンター所属のものしか支給されないもの。それこそおぬしが宝探し屋である証なのじゃ！」

「あのーほんと人違い……」

プロ意識があるのか、極力人違いで通そうとしている。

この青年は将来凄腕の宝探し屋になるわい！
トレジャーハンター

そんなことを考えているうちに、広場が騒がしくなった。

「見つけたか？」

「いやまだだ！」

「こちらの路地を探すか！」

遺跡の方に逃げた方がよいような。

「むっこうしちゃおられん。早くこっちへこい」

サラーは青年に活を入れながら砂漠の遺跡まで走った。

最深部近くで、いまだH・A・N・Tを起動していない青年一緋勇
ハント
龍麻を見て、サラーはH・A・N・Tを起動するように言う。
ハント

「えっ？使えますか？」

「新人だから知らないのかもしれないが、H・A・N・Tは遺跡での
ハント
ナビをしてくれる優れものじゃ。だから起動して使えるようにして
おくんじゃよ」

「だから、人違い・・・」

「まだいっておるのか！」

「うう・・・」

緋勇龍麻はいそいそとH・A・N・Tを起動し自分の名前を入れる。
ハント
そしてこの瞬間

緋勇龍麻はロゼッタ協会所属の宝探し屋となったのだ。
トレジャーハンター

「しかし、おぬし筋がいいのお」

「えっ?？」

トレジャーハンター

「宝探し屋としての才能があるわい」

「いいえ、人違いです」

「謙遜しよって……」

サラーの見る限り、新人宝探し屋^{トレジャーハンター}には見えなかった。

腕も立つし、謎解きも上手い。

それに敵の位置が分かるかのように行動している緋勇龍麻
新人なのかと疑問を持つほどの腕前なのだ。

しかも、H^{ハント}・A・N・Tを使わずである。

流石に最深部までくると、使わせないと危ないと思い、起動させた。

そろそろ秘宝が手に入る。

その前にはきっと試練があるはずだ。

でも、緋勇龍麻はきつと簡単に試練を突破するだろう。
そんな確信がサラーの中にあった。

「緋勇!くるぞ」

目の前には化け物―アヌビス―がいた。

人間不信になりそうです(前書き)

改變しました！

人間不信になりそうです

イシスの碑文を手に入れて、外へと脱出したのはいいが……
なんか変な部隊に囲まれた。

「うわ……戦場？すみません。邪魔して」

そそくさ逃げようとしたら、

「何をいっとるんじゃ！秘宝レリックドーンの夜明けじゃよ！」

そのレックなんとかってなんっすか？

「その秘宝をこちらに渡しなさい」

「えー人から物を奪うなんて」

かなりの棒読みだ。こんなシリアスな場面苦手なんだよね！

というか、俺の体がよく分からない目の前の老人を拒絶している。

「あなたの手の中にあっても仕方がない。秘宝はしかるべきところに納められるべきなのだ」

きた！上から目線。こいつ絶対頭固いよ！

「えーただではあげられないな」

ノリノリで答えてみる。

「……………いくらだ？」

老人は不機嫌そうに言う。

「おーわかかってるね！君の財閥の全財産」

てへっ☆っといった感じで答える。きつとイライラするだろう。そういう風に仕向けてるってのもあるけど。

「ふざけているのか？有利なのはこちらだぞ？」

銃を構えられる。

「おーおー碑文イライナイの？壊すなんて簡単な話なんだよ？」

こいつらは、まだ俺の方が優位だということに気がついていないのか……

でも逆転することなんて簡単。サラーさんを人質にすればあつという間に逆転する。

「このわしを揺さぶるか…しかし、不利なのは変わらないよ」

サラーさんが人質になっていた。やっぱり……

何が何でも手に入れたいわけね。

「ちっ」

思わず舌打ちしてしまう。

いきなり背筋がぞくりとする。出てきた穴を見た。すると幽霊が出てきた。

あれ？ミサちゃんの友達がいる……

「おぬしらは、この墓の怒りを買ってしまったのじゃ」

サラーさんは兵士の隙をつき、俺の腕をとり走りだした。

ああっ中国から遠退いていくー

そして砂漠で力つきた。

久しぶりの砂漠だよ。夢の世界で砂漠ぽいところ行って以来だよ。砂漠ってやっぱ体力がすぐに奪われる……

目を覚ますと目の前には看護婦さんとお医者さん。
驚く。

「先生患者が……」

お医者さんが指を三本だし、何本と聞く。

素直に答えると

「大丈夫なようだな。ハントのおかげで死なずにすんだわけだ」

ゆったりとした口調で言う。

「俺！巻き込まれただけなんですけど！」

「本当に大丈夫？」

看護婦さんがきつい目で見る。

「いや…だから、人違い！」

お医者さんに言うが、

「記憶が混乱しているのだろう」

そういつて取り合ってもらえない。

うわーん！

宝探し屋とは ロゼッタ協会専任医師の場合（前書き）

お医者さん視点です。

宝探し屋とは ロゼッタ協会専任医師の場合

「先生！」

どうやら、新人君は目が覚めたようだ。

確か彼は、秘宝レリックドーンの夜明けに襲われたという報告があった。

彼は本当に運が良かった。

ハント H・A・N・Tのおかげで助かったようなものだ。

ハント H・A・N・Tには生命維持波形を発する機能がある。
ヴァイタルサイン

たまたまその反応を受信したため救出することができた。

脱水症状を起しているだけで、命に別状はない。

一応、診察をかねて新人君の様子を見に行きましょう。

「さて、これは何本に見える？」

「えっと三本です」

「大丈夫だな」

すこし一安心。医療に絶対はない。患者が目を覚ますまでは気を抜けない。

「今後、嘔吐や平衡感覚に異常があるようなら、言ってくれ」

「あの、俺！巻き込まれただけなんですけど！」

「本当に大丈夫？」

看護婦がきつい目で見ると

「いや…だから、人違い！」

新人君は記憶が混乱しているようだった。

でも、仕事は待ってくれない。酷だが一通り新人君に説明し始める。

「われわれは、ロゼッタ協会の専任医師と看護婦……つまり宝探^{トレジャーハンター}し屋専用の医師と看護婦だ」

「えっと……ロゼッタ協会って何ですか？」

「まだ記憶が混乱しているようだな」

「混乱するにしても、プロである宝探^{トレジャーハンター}し屋が協会のこと忘れるのかしら？それに砂漠で遭難しかけるなんて」

看護婦が口を出す。

「トレジャーハンターって？」

一瞬無言になった。

「先生！この患者！」

「そう、声を荒げるでない。きっと頭を打って記憶が混乱しておるのじゃろう」

「でも、協会や素性のことを忘れるなんて」

「頭を打っている可能性があるからの……なんとも言えん。でも秘宝^{レリックドーン}を秘宝の夜明けの連中から守りぬいただけでも大したものだ」

「そうですが……」

「ともかく、君を案内した老人も無事だ。二人とも無事でよかったよ」

新人君を見てそう思う。

すると、依頼が来たようで、電子音が鳴り響く。

「依頼かね？」

「依頼！？」

「先生！」

「こっちにも書類が来たようだ」

新人君に書類を渡す。

「その書類に必要なことを書き込んでくれ」

「えっ？」

「さあさあ」

「これも宿星か？」

新人君は何故かなきながら書類を書いていた。

二回目の学園生活（前書き）

改變しました……

二回目の学園生活

飛行機の中で、手続きを行い（させられた）日本に戻ってきた。

「日本に戻る前に中国に行きたかった……」
久しぶりの日本。

懐かしい。

と同時にになにか異変が起こっていることに気がつく。

「俺のせいかな？」

龍脈が動きだしたのか、それとも前の戦いの影響がどこかででているのか……

「ここか」

新宿

前の戦いを思い出しつつも学校へと入った。

まず目を疑った……

学生服が届くなんて！

何考えてんだ！っていうか、依頼文をよく読んでいない俺のせいかな？

よく考えたら、あの書類学生用！

しまった！うっかりしてたぜ……

これじゃあ友達に会いたくないなあ

だってこの歳になって学生服着てたら笑われる。

連絡はやめておこう。

みんな心配しないでくれよな！俺は頑張ってるから！

なんだかんだで学園生活は始まった。

「何かあったら、先生いつでも相談に乗るからね」

俺の担任になった雛川亜柚子（ひなかわあゆこ）先生がやさしく声をかけてくれる。

なんだか、葵を思い出す人で…

「ええ…ありがとうございます」

懐かしかった。

周りの視線が痛い。

でもやっぱり気づいて！俺じゃ無理があるのか……？

席は、元気な女の子が手を挙げて教えてくれる。

「私の隣があいてます！」

周りの子は、「明日香積極的ー」とか言っている。

「あたしは、八千穂明日香（やちほあすか）。よろしくね」

昼休みになって声をかけられた。

一通り会話すると、彼女は学校を案内してくれるそうだ。

京一みたいに物好きだな。

いろいろな場所を案内してくれる。

図書館に行くと、古い文献がある部屋に入れてくれると言っていたのだが、七瀬月魅（ななせつきみ）という少女が現れた。

「あなたは、超古代文明の存在を知っていますか？」

「いや…」

杏子を思い出すような、眼鏡っこ。
博識で、古代文明について熱く語る。
そんな女の子だった。

あと保健室と売店を紹介してもらった。

売店に着いたときは、おじいさんが八千穂さんのスカートをめくった。

ごめん八千穂さん……俺は止められなかった。

途中音楽室で背の高い少年がピアノの前にたっていた。

八千穂さんは知っているようで……

「取手（とりで）くん？」

取手ね……

雰囲気がやばい。何かに取り付かれてるのか？

「なんか話しかけづらいね」

八千穂さんと一緒に音楽室を後にした。

その後、不思議な雰囲気の女の人（白岐（しらぎ）というらしい）
と会話をして

屋上へとたどり着く。

気配がする。

それと合わせてアロマの匂い。

闇…

昔の戦いのおかげで、変に鼻がきく。

向こうは、接触する気がないのか、こちらを無視しているようだ。

「あそこが、お墓なんだよ」

「墓か……」

あそこからも闇の気配がする。
なんとなく見えてきた。

「…ふあーあ…なんだ？ 転校生か？」

一人の少年がこちらに近づく。

アロマの匂いが漂う。

「あー皆守くん！」

どうやら、問題児のようだ。

しよっちゅうサボタージュしているようだ。

言っとくけど、俺って結構まじめだからな！

親友にも勉強教えられるほどなんだからな！

「うるせえ……あと転校生……あの墓には近づくな。平和な生活が送りたいのなら、忠告しとくぜ」

「そりゃどーも」

あきらかに近づいてほしくない理由があるようだ。

八千穂と一緒に屋上を後にした。

どうやら、この学校の闇はかなり深いようだ。
どこまで、俺の力が通じるかな？

緋勇龍麻はすごくお人よしであった。

緋勇龍麻とは 八千穂明日香の場合（前書き）

明日香視点で補完小説！

緋勇龍麻とは 八千穂明日香の場合

「また転校生が来るんだって！」

「まじで！行方不明にならないといいけどな」

「チラッと見たけどイケメンだったよ！行方不明になったらもったいないなあ」

「えー男かよ！」

クラスがざわめく。

転校生なんて珍しくない。

この学校では……

それに転校生が行方不明なんてしょっちゅうあることだ。

それが自然で誰も違和感がない

普通、行方不明になったら警察沙汰になるはずなのだが……

全寮制だからなのか、慣れすぎたせいなのか誰も疑問を持たなかった。

逆に自分が行方不明にならないように気をつけている。

「ちょっと退屈なんだよね」

八千穂明日香は、全寮制で学校から出れないためストレスをためて

いた。

普通なら学校から出られるものである。
でもこの学校は普通じゃなかった。

入ったら卒業まで出れない学校であった。

「新しい転校生か……」

ついこの間も転校生が来た。しかしその少年は学校の掟を破り行方不明となったのだ。

なんともいえない気持ちになる。

「それでは授業を始める前に、転校生を紹介します」

雛川先生の授業が始まる前にうわさの転校生の紹介があった。

どんなやつなんだろう……

「緋勇龍麻です。これからよろしくおねがいします」

一目見たときから、雰囲気違った。

今までのどんな転校生より魅力的であった。

周りも、緋勇くんの魅力にボーっとしている。

先手必勝！印象付けるためにも

「それじゃ……席は……」

「はい！私の隣があいてます！」

大きな声で緋勇くんにアプローチした。

なんか、彼は私の生活を変えてくれる気がする。そんな思いで手を上げていた。

「さっきも言ったけど、緋勇龍麻です。よろしく」

なんか思っていたより寡黙な青年であった。
でも独特な雰囲気を持っている。

せっかくアプローチしているから、学校案内もしなきゃ！
そう思って緋勇くんに案内を申し出た。

図書館に行って月魅に会ったり、保健室へ行ってみたり（結局先生がいなくて紹介できなかったけど）売店へ行って……スケベジジイにパンツ見られたけど……緋勇くんを紹介できたし。途中白岐（しらき）さんと会話（緋勇くん和白岐さんだけ）できたし、いいことありまくりだなあ！

最後に屋上に行った。

屋上にたどり着いた瞬間、緋勇くんの顔がゆがんでいた。
歪んでいたというより、哀れみの目をしていた。

なぜ？と言葉に出来ず、何もないふりをして、緋勇くんに墓地の話をする。

「ふぁーあ、うるせえな」

声ができる方を見ると皆守（みなかみ）くんがいた。
相変わらずサボっているようだ。

「もー！一人でこんなことばっかしてないで少しは皆と遊んだほうがいいよ！」

そう皆守くんは忠告して緋勇くんをつれて階段を下りていった。

皆守くんも、緋勇くんと友達になれたらいいのに。

そう思いつつも教室へと戻っていった。

緋勇龍麻とは 八千穂明日香の場合（後書き）

もしかしたら、また改変するかもしれません。

新たな友達（前書き）

未熟な文章ですが、お付き合いいただけたらうれしいです。

新たな友達

「では、今日の授業はここまで」

久しぶりの授業だった。

うん。俺忘れてるな。

化学なんて何年ぶりだよ！

っていうか、二酸化マンガンとか使わないからな！

「おいッ！転校生」

振り向くと、昼に会った皆守とか呼ばれている少年がいた。

「おお！不良がいる」

「誰が不良だ！」

「えーサボりは基本不良って設定だぞ！」

「確かにサボりが多いが……っていうか、いつの時代の設定！？」

えー俺が高校の時はそんな感じだぞ！

「せっかく授業に出たんだ。クラスメートとして歓迎してくれよ」

「おお！同じクラスだったんだな！歓迎するさ」

改めて皆守を見る。

「そういや、名前は？俺は緋勇龍麻です」

「皆守甲太郎（みなかみこうたろう）だ。よろしくな」

「ああ！こっちこそよろしくな」

「授業も終わったし、寮に一緒に帰ろうぜ？」

「へっ放課後とかないのか？」

「ああ、転校生だから知らないのか。校則で放課後になったら速やかに校内から出なければならぬことになっている。違反したものは《生徒会》が厳しく取り締まっているからな。みんな従順なもんさ」

「ふーん。そんな校則があるんだ……しかし皆守は不良なくせに校則知ってるのか……そんな設定許しませんよ！普通不良ってもんは、校則を破ってなんぼでしょ！」

「……お前馬鹿か？」

皆守の視線がいたい……

「めんどろなことは起きないことがいいに決まってる。生徒会に目を付けられたら平穏な日常が送れないからな」

目が冷たい。何もかもあきらめている目だった。

「ふむふむ。皆守くんは、臆病な不良ということですか」

少し茶化してみる。

「お前……はあー」

ため息をつかれた。いつとくけど、キャラ作ってんだぜ？これでも。

「ん？どうした？」

おどけながら聞く。内心はニヤニヤしてますけどっ

「初めて友達になるんじゃないかと後悔したところだ」

「本人を目の前にしてそういうこと言うかな」

「たくっ帰るぞ」

皆守と一緒に校舎を後にした。

「あそこがMummys^{マミーズ}で食堂だ。あそこと体育館の間を行くと俺たちの寮が見える。もちろん男子寮と女子寮は隣り合わせだが、女子寮は生徒会が見回ったり、警報機がついてるらしいからな。不法侵入とか考えるなよ？まあ興味のある女がいればだけど」

「んー残念ながら、紳士たるもの女子寮に不法侵入とかできません」

うんうん。不法侵入とか覗きとかできるかよ。昔の記憶が……

「不法侵入したい輩の台詞だな」

「えーそうかなあ」

「おまえ無自覚であんなこと言っているのか？」

「えっ？」

「いやいい」

皆守はため息をつく。

あれ？俺、変なこと言った？

そのまま寮へと帰りついた。

新たな友達（後書き）

なんか微妙な話になってしまった。

緋勇龍麻とは 皆守甲太郎の場合（前書き）

おそくなりました！

緋勇龍麻とは 皆守甲太郎の場合

せっかく屋上で自主休講していたのにな。

昼休みに屋上に上がってきた人間が二人。

様子見をすることにする。すると一人はやたら俺に世話を焼きたがる八千穂明日香だった。

もう一人は……見たことのない奴だった。

「あそこが、お墓なんだよ」

「墓か……」

墓に興味を持つとはな……

生徒会に目を付けられる前に忠告しとくか。

八千穂にはそれなりに情がある。

それに行方不明にでもなられたら、罪悪感みたいなものだってあるしな。

「……ふあーあ……なんだ？ 転校生か？」

わざとそういう。

転校生は気がついていたよといった目で見ている。
あんな目を見るのは初めてだ。

この転校生なにかあるな……注意しとくか。

「あー皆守くん！」

八千穂は大きな声で俺の名前を言う。

「うるせえ……あと転校生……あの墓には近づくな。平和な生活を送りたいのなら、忠告しとくぜ」

「そりゃどーも」

あくまでもだるそうに、一般のさぼりの学生っぽく忠告をする。

転校生は、忠告を真剣に聞いていないようだ。

しかたがない。夜見回りついでに脅しとくか。

八千穂に見つかったし、これ以上さばれないと思った俺は、仕方が無く授業に出る。

まあ寝てることが多いけどな。

かったるい授業。

転校生は授業を受けている。

まじめなこった。

授業終わりのチャイムが鳴る。

「おいッ！転校生」

声をかけると

「おお！不良がいる」

「誰が不良だ！」

思わずツツコミを入れてしまった。

「えーサボりは基本不良って設定だぞ！」

「確かにサボりが多いが……っていうか、いつの時代の設定！？」

こいつ俺と同じ年だよな？

ちよっとジェネレーションギャップを感じてしまった。

「授業も終わったし、寮と一緒に帰ろうぜ？」

変に墓を調べられても困るしな。監視という意味も込めて誘ってみる。

「へっ放課後とかないのか？」

きょんとした顔で言う。
前の学校では当然あったであろう放課後。

「ああ、転校生だから知らないのか。校則で放課後になったら速やかに校内から出なければならぬことになっている。違反したものは《生徒会》が厳しく取り締まっているからな。みんな従順なもんさ」

脅しの意味も含め転校生に校則を教える。

本人はあんまり納得していないようだ。

「しかし皆守は不良なくせに校則知ってるとか……そんな設定許しませんよ！普通不良ってもんは、校則を破ってなんぼでしょ！」

なんだよ設定って……

「……お前馬鹿か？」

冷たい目で見る。最近の不良は頭を使って効率よくさぼるのが主流なんだよ。

それに……

「めんどろなことは起きない方がいいに決まってる。生徒会に目を付けられたら平穏な日常が送れないからな」

緋勇の目の色が変わったような気がした。

見間違いか？

「ふむふむ。皆守くんは、臆病な不良ということですか」

なんでそんな結論になるんだ！

緋勇の思考回路大丈夫か？

「お前……はあー」

思わずため息が出る。

「ん？どうした？」

緋勇がニヤニヤしながら聞く。こいつ！

「初めて友達になるんじゃないかと後悔したところだ」

「本人を目の前にしてそういうこと言うかな」

「たくっ帰るぞ」

緋勇と一緒に校舎をでた。

途中、八千穂に会って緋勇君に優しいねとかいいやがって……

そんなじゃない。

ただ、何か惹かれるものがあるのかもしれないな。

そして寮へとたどり着いた。

緋勇龍麻とは 皆守甲太郎の場合（後書き）

うーん。さらに微妙な文章。主人公以外の視点って難しい・・・補完になっていると願っています。

トラハンター（前書き）

前載せていたものの改変版です！

トラハンター

「さてと」

俺は準備をする。いつの間にか届いていた荷物を整理する。

っていうか、なんでナイフとか銃とか支給されんの？
ここ日本だよね！？

銃刀法違反とか無いわけ？

まあ俺は拳さえあれば問題ないからな。

「……………」

これは……

誰の回しもんだ。

黄龍甲
こくりゅうこう

一瞬忍者の顔が浮かぶ……

でもあいつって骨董品屋だしな……と考えを打ち消す。

拳で戦うと決めて、これがあるのは便利だ。

ありがたく使うか。

真っ暗闇の中、俺は歩く。ここまで誰にも見つかっていない。

墓の近くまで行く。
八千穂がいた。

「！」

「なんだ…緋勇くんか」

「八千穂…」

「緋勇くんは、幽霊が見たくてきたの？」

「ああ…」

「それにしては……大きいカバンを持って……何するの？もしかして、スパイとか？」

目を輝かして言う。ここは一応誤魔化しておかないとな！

「いいや…トラハンターだ」

あっ間違えた……

「そうそう！トラハン……ってただの虎狩りのことじゃない！」

少し考え八千穂は怒る。

「虎がいないかちよつと見回りに…」

ここは貫くしかない！

「もしかして緋勇君って天然？」

哀れみの目を向けられた。せっかく隠したのに……
もう気がついてるみたいだから、

「冗談はさておき…」

あたりを見回す。

「そうだね。なんか見つけた？」

「ああ…ビンゴ！」

穴が開いている。入ってきてくださいといっているかのように……

「穴か…ますます怪しいね…」

八千穂は穴を注意深く見る。

すると足音が聞こえる。それとアロマの匂い

「……なにやってるんだ？」

後ろを振り返ると、皆守がいた。

「びっくりしたー」

八千穂はすぐに笑顔になる。

「おまえら…見つけたのが、俺だからいいものを…生徒会は目を光らせてるぞ？」

「えー皆守君もこんな夜に出歩いてるじゃない！」

八千穂は、文句を言う。

「そうだー！八千穂もっといってやれー」

皆守をいじめようと、加勢する。

「緋勇……お前……」

睨んでくる。さらに悪ノリしてみた。

「ぎゃー皆守が睨むー」

「悪ふざけもたいがい……」

「誰だ……墓地に無断で入る奴は？」

三人同時に声のする方をいっせいに見る。

そこには、黒いマントをかぶり、幽霊みtainな格好の人だった。しゃがれていて老人のようである。

ちょっとやばいかな。なんか特殊な力を持っている印象を持つ。

特殊な気の持ち主ということもあるかもしれない。

気と言うものは、人をあらわす。

人によって、大きさ、色、形が変わる。

といっても、気を操ることが出来なければわからないのだが……

目の前にいる老人の気は青くしかも小さい。普通の人とはまた別のようなのだ。

「こいつは墓地の新しい管理人だ」

「さっさと出て行け。埋めるぞ？」

「埋められると困るかな？」

困った顔でいっしてみる。一人だったら、逃げていた。

二人を残して逃げるほど俺は小物じゃない。

「こんなところでおどけるとは、大物なのか、大馬鹿なのか」
老人は注意深く俺を見つめる。

「こいつは転校生なんだ。見逃してやってくれ」

皆守が止める。

この感じを見ると、生徒会と繋がっているかなって思ってたけど、そうでもないのか？

「……今回は見逃してやる。さっさといけ。俺の気が変わらんうちにな」

「仕方が無い。帰るか」

俺たちは、そこから立ち去った。

老人は、穴が開いているところを見つめ

「なぜ隠されていた岩戸が開いているのだ……？」

そうつぶやいた。

トラハンター（後書き）

しばらくまた息をひそめるかもしれません。

緋勇龍麻について ある男の場合（前書き）

少し改変。ある男って・・・黒幕とかわらな（ry

緋勇龍麻について ある男の場合

ある男は、緋勇を見ていた。

屋上の方でひっそりと。

生徒が怪しい動きをしていないか。

とくに転校生が来たときには、必ず行なう。

「……転校生か……今回はどこまで行くのか楽しみだ」

その男は、緋勇龍麻を遠くから見ていた。

転校初日で、わが領域に入ってくるとは……

あいつからの報告に目を通す。

今回の転校生は、よく分からない。

報告にはそう書いてあった。

確かに、よく分らない……

特別な力を持っているようにも見える……

隠しているのかそれとも、そんな力など持っていないのか。

同級生とつるんでいる様子を見ている限り普通の転校生だ。

力を誇示するわけでもなく……

ただ、時の流れに身を任せているようだ。

しかし墓の近くの穴を見つけた瞬間の鋭い眼

あれは戦士の眼であった。

これが意味するのは一体……

これからが楽しみだ。

こいつはここまでするのか。

「その可能性は低いだろうがな」

せいぜいあがくがいい緋勇龍麻。

屋上で緋勇と八千穂と皆守と墓地の管理人の行動を見ていた黒いコート
の男は、消えた。

数秒たって、ある一室の窓が開く。

風が吹く。

「この学園の闇はそうとう深いということか……」

緋勇龍麻はつぶやいた。

「とりあえずロックフォードを終わらせるか」

PCを立ち上げ、画面と睨みあいを始めた。

緋勇龍麻について ある男の場合（後書き）

ある男が視点って！誰かわかりますか？もちろんあの人ですよ……
視点誰にしようか悩んだ結果がこれです。
次からこうならないようにしたい……

始まりの事件（前書き）

おそくなりましたが・・・
次の視点誰にしよう・・・

始まりの事件

「2－Bの葉山真紀だな？」

音楽室で、少年は尋問のように聞く。

「そ……そうだけど……」

少女は恐る恐る答える。

「同じクラスの男子生徒と深夜、墓に無断で入り、著しく風紀を乱した」

少年の言葉に、少女はドキリとする。確かに、そこに入った。

まさか……

「墓に入ったものは処罰しないといけない」

「何をいって……？」

「ねえ姉さん」

「お姉さん？何を言ってるのッ？……えっ？何処？何処？何処に行ったの！？」

少女の目の前には、覆面の男。

「その美しい指を……姉さんのためにくれないか？」

「キャー」

— — — — —
— — — — —
— — — — —

墓から帰って、まあ徹夜でゲームを終わらせましたよ。

意外に難しかったロックフォード……

なんというか……スフィックスの謎だっけ？ 難しい。

おかげでクリアしたところには朝日がまぶしかった。

でも感動する話だったなあ。

「緋勇君！ おはよう！」

後ろから元気な声が聞こえる。八千穂さんがきた。

「ああ。おはよう」

「大丈夫？ 眼の下クマが出来てるよ？ 気分悪いなら保健室行くべきだよ」

「徹夜でね……」

「徹夜？」

「あはは……大丈夫だよ」

突然思い出したように八千穂は言う。

「あっ昨日の穴凄く気になるから、絶対私も連れて行ってね！」

「……」

やっぱり寝不足はしんどい。

保健室で仮病で休んだほうが全快した方がいいかも。

「聞ってる？ 緋勇君」

八千穂の話を聞いていなかった。

「ああ！ うん。そうだね」

徹夜のせいで頭が回らない。

「あっそうだ！ いざというときの連絡先教えるね！」

そういつて生徒手帳にプリクラと連絡先を教えてもらった。

「へへへ！ あー！ 今日理科室で授業じゃん！ 私は準備があるから先に行くね！」

八千穂を見送る。しかし眠すぎる。

あれだな。爆睡覚悟で授業だな。

そのときにメールが入る。七瀬さんからだ。

内容は……八千穂に嘘をついたことが仇になったことが分かるメールだった。

メールをチェックし終え、さて自分も理科室に移動しようと思ったときに、白岐が現れた。

「おはよう」

普通に挨拶する。すると向こうも普通に返してきた。

「あなたは、もう墓地へ行ったの？」

「ああいったよ」

こういうタイプは嘘をついても意味がない。

なんか雰囲気ミサちゃんなんだもん。嘘ついてもきっと知……知っている

「そう……なら気をつけることね。闇は常に私たちの傍らにあり……その《力》に魅入られたものは誰も逃れることはできない」

「そうだね」

ニコニコしながら答える。闇なんていつでも身近にあった。今も、昔も。

「……………」

「遅れるから、俺は行くよ」

白岐にそういい、俺は教室を出る。

廊下の真ん中に石があった。

「ん？なんで石が？」

思わず拾ってしまう。

「ふふふ！拾ったね？緋勇龍麻は石に興味アリと」

「うわぁ！」

眼鏡を掛けて鉱石標本をもった少年がいた。

「やぁ」

その少年は声を掛けてきた。

「ああ……これ君の？」

「まあね。ただもつと言えば、もう少し石灰が入った石が欲しいんだ」

「ああ……そう」

「僕は黒塚至人（くろつかしびと）遺跡研究会っていう部の部長をやっているんだ。よろしく」

この学園は、なんというか……個性豊かな人物が多いのだなぁと感じてしまった。

「ふふふ！今度遊びに来るといい。僕は四階の南棟にある部室にいるからさ」

そのまま走り去る黒塚を見送って、俺も理科室へと直行した。

時間が過ぎ、昼になった。

「ふぁーあ……朝から授業なんて出るもんじゃねえーな。午後は保健室で一眠りするか」

皆守くんがさぼる宣言をしていました。

「さぼりかー」

「ああさぼりだ。授業楽しいか？」

「えっ？まあな……」

とても言えない……

何年前と同じ内容だから、テスト楽勝だぜ！とか言えない。

「ふーん。そうだ、八千穂から聞いたんだが、お前トレジャーハンター宝探し屋なんだってな？」

「えっ？」

バサバサ

持っていた教科書類を盛大に床に落とす。確かに、口止めしなかったけど！

なんかばれてる。

あんだけ、サラーさんにプロ意識あるねってほめられたのに……

といっても、実際に人違いなんだけど……

「何、荷物落としてんだよ。まあ八千穂に見つかったのが運のつきだな」

「うっうん。そうだな」

「それよりも、今日も墓に行くのか？」

「ああそのつもり」

「キヤー！！」

悲鳴が聞こえる。頭が動くより先に体が動く。

昔もそうだった。悲鳴があれば何かある。

モンスターが現れたか？こんな昼間に！

悲鳴のあった部屋へと向かう。

そこには、手が干からびている女性がいた。

「何があった？」

皆守が女子生徒に聞く。

「誰かが音楽室にいて、いきなり飛び掛られて……それで……化け物！化け物がいたのよお！」

「とりあえず、落ち着いて、皆守！安全な場所は？」

「えっ？ああ、とりあえず保健室だな」

「案内して！」

俺は女子生徒をかかえ、皆守の後を追う形で保健室へと直行した。

始まりの事件（後書き）

うう・・・もう少し進みたかった。
次には蜃気楼の少年を終わらせたい・・・

緋勇龍麻との出会い 黒塚至人の場合（前書き）

結局彼を出してしまうという・・・

まあなんとかなるかな？

オリジナル設定アリ

緋勇龍麻との出会い 黒塚至人の場合

石たちが騒ぎ出したのは、つい最近。

いままではこんなことは無かった。

騒ぐといったら、誰かが消えたときだけだった。

墓地にある石たちが噂話をする。そのぐらいだった。

でも今回は違う。

昨日くらいからうわさになっている転校生。

石たちも騒いでいた。

僕がいる前では何もいわないけれど……

「くるよ。くるよ」

「あの人がくる」

「あの事件を解決した神に近い男がくる」

そういていた。

何のことか分からなかった。神に近い男。そんな人がこの世にいるのだろうか。

その男が転校してきた初日の夜

石たちはまた騒ぐ

〔あの転校生が墓地に来ている〕

〔とうとう遺跡の入り口を見つけた〕

〔やっぱりあの人はこの闇を〕

〔そして救ってくれる〕

そんなことを言っていた。

僕は石たちが騒ぐくらいの男を見たかった。

もしかしたら、石たちにもてはやされているから、嫉妬したのかも
しれない。

だから、僕は近づいた。

彼は、何気なく石を持った。

すると石は

〔やっぱりこの人だ〕

そう囁くのだ。

「石たちが興味を持っているという彼。僕も興味深いや」

そして

「ふふふ！拾ったね？緋勇龍麻は石に興味アリと」

「うわぁ！」

いきなり出てきて驚いているみたい。

目の前にすると石たちが言うことも分かる。

なんだか、恐れ多くて、そして光のような人だなと思う。

一通りの会話をして去る彼。

遺跡にもぐっているらしいし……

石好きとしてはやっぱりチェックしとかないとね！

黒塚至人は微笑みながら自分の教室へと戻っていった。

緋勇龍麻との出会い 黒塚至人の場合（後書き）

短くてすみません。

そして特殊設定作ってすみません。

黒塚はなんか石と意思疎通（しゃれじゃないですよ！）出来そうな気がしてやってみました。

石と会話できるからあそこにいたみたいなの？

はい、石好きだけにするにはもったいないなとおもって作った設定です。

苦手な方すみません。

なつかしのあの人（前書き）

前回のオリジナル設定・・・よかったのでしょうか・・・
ちよっとやりすぎかなとおもいつつ・・・

さあ次の話へどうぞ！

なつかしのあの人

保健室にたどり着く。

扉を開けると同時に皆守は叫ぶ。

「おい！急患だ。カウンセラーはいるか？いないのかッ！」

俺は、保健室に入って直ぐのところに目の前には大きな男が立っている。

「どいてくれないか？」

生気がないようにも見える。

「ああ……すまない。いまどける」

すると大きな男は

「君は……誰だ？」

俺に問いかけてきた。

「俺？緋勇龍麻だよ」

笑顔で返す。その間も男の気の流れを見る。

何かに気の流れを阻害されているようだ。黒いもやっとした何かに

……

あの気の流れ方は以前戦ったやつらと一緒にだ。

そう、力が目覚め悪しきことに使っていたやつらと一緒に

「緋勇龍麻？……そうか君が噂の転校生」

「何だ、A組の取手（とりで）じゃないか。またサボっていたのか？」

皆守がそういう。保健室仲間みたいなもんなのだろう。

「僕、最近頭が割れるよう痛くて……今日は薬を貰いにきただけなんだ」

頭が割れるほどね。さっきから彼の体で動き回っている黒い物体が気になる。

「そうか」

「緋勇くんだったけ？僕は3-Aの取手鎌治（とりでかまち）皆守君とはよく保健室で会う内に話すようになって。といっても僕はルイ先生に心理療法カウンセリングをしてもらいに来てるだけで……」

沈黙が流れる。すると取手が

「……そういえば気になったんだけど、その女子どうしたんだい？」

「あつ！ああ！新たな犠牲者さ。誰だか知らないが酷いことするぜ」

皆守が答える。取手は動揺しているようにも見える。

「……それじゃ、僕は行くよ」

「たまには太陽にでも当たれよ。顔色悪いぜ？」

皆守の言葉に取手は沈黙のまま去っていった。

「大丈夫かよ……取手のやつ……っと！カウンセラー！」

皆守は保健室の主を探している。

「騒々しいな！そんな大きな声を出さなくても聞こえている」

白衣の女の人が煙管をふかしている。

「カウンセリングがお望みかい？また後にしてくれ、こっちはいい気分で一服していたところなんだ」

この雰囲気見覚えがある。

やさしい気が流れている。ああこの感じどこでだ？

「いるなら返事しろよ！」

「うるさい坊やだ。病人なら奥のベッドが開いているそこに寝かせてくれ」

言われたまま、俺は奥のベットに寝かせる。

「っと君は誰だ？」

えっ？会ったことがない人なのか……面識がないというのに懐かしい雰囲気。

どういふことなのだろう。

「うちのクラスの転校生だ。職員会議でも言っていただろ？」

皆守がフォローしてくれる。

「ああ、確か昨日ぐらいい言っていた気がするな……確か名前は」

「緋勇龍麻です」

「そうそう、緋勇龍麻。誰かと違って礼儀がなっているね」

皆守は押し黙る。

「私の名前は劉瑞麗^{りゅうるい}。広東での正式な名前はソイライだが、皆大概、ルイと呼ぶ。中国の福建省から去年、この学園に赴任してきた、学園専属の校医と臨床心理士^{カウンセラー}をやっている。怪我だけじゃなく心の悩みがあれば保健室にくるといい」

この瞬間確信した。

劉家だ。だからなんだと。

向こうは名前を聞いただけでは気がついていないようだ。

劉弦月（りゅうしえんえん）に近しきものだから。懐かしかったのだ。

「ん？どうしたんだ」

「いえ、それよりも、女子生徒を見て欲しいんですが」

ルイ先生は女子生徒の干からびた手を見る。

「なるほど。……まるで枯れ木だな。生気が吸い取られているようだ。どこで見つけたんだ？」

「音楽室に倒れていたのさ」

「音楽室に？そうか……」

「なんか知ってるのか」

「いや」

「……」

「君たちは授業に戻れ。後は私に任せておくがいい」

彼女なら安心だ。この女子生徒は助かる。

これで、一般の人だったらやっぱり桜塚病院まで運ばないといけないのかなと思ったよ。

気を操ることが出来るのなら、大丈夫だ。

「そうだな。保健室に運んだだけでも十分だろ。これ以上厄介ごとに巻き込まれたくないしな」

ルイ先生は黙っている。

「それじゃ頼んだ」

皆守と一緒に保健室を出た。

もうすぐ昼休みだ。

「なあ皆守……」

「んだよ」

「やっぱいいや。また次の機会に言うよ」

笑顔で言う。

「そうか……さてと、保健室が使えない以上屋上で昼寝でもするか」

「午後の授業はでろよ」

「まあ、考えとく。そうだ！俺も気が向いたらお前の夜遊びに付き合ってやるよ」

そういつて皆守は連絡先を教えてくれた。ついでにプリクラも貰った。

皆守もなんだかんだ言っ
て気になるのかな？
なんて思いつつも

その間さっき言いかけたことを思い出す。

ああ……言えねえよな。

俺巻き込まれ体質だから、面倒なこと厄介なことは日常茶飯事って
さ……

なつかしのあの人（後書き）

うわあああん！おわんねえー

取手のターン終わらせようと思っていたのに！！

おわんない！

カウンセラーのターンだった！！次こそ！！

緋勇龍麻との出会い 取手鎌治の場合（前書き）

遅くなりました！そして短いです！

緋勇龍麻との出会い 取手鎌治の場合

「君は……誰だ？」

「俺？ 緋勇龍麻だよ」

初めて会ったのは、保健室だった。

彼が保健室に入ってきて、僕はルイ先生に心理療法カウンセリングを受けて薬を貰ったところだった。

第一印象は輝かしい、闇を知らない人に見えた。

僕にはまぶしすぎて、そして一番嫌いな人間だ。

「緋勇龍麻？……そうか君が噂の転校生」

皆守くんと少しお話をする。

そして僕は彼らと別れ当ても無く歩き始める。

ああ、彼が噂の転校生か。

僕の前では、どんな人間でも干からびる。

彼も処分しなきゃいけないのかな？

ああ頭が痛い。

でもこれでいいんだよね？姉さん

そうしているうちに放課後になった。

僕は走った。黒い砂が追ってくる。

「やめろッ！くるな！」

僕は必死だった。

「僕に近寄るな！来るなア！！」

気がつくど、目の前には皆守くんと緋勇くんがいる。

「どうしたんだ？何かあったのか？」

皆守くんは心配そうに聞いてくる。

「いいや……なんでもないよ」

緋勇くんがこちらを見ている。

ああそんな眼で見ないで……

いつの間にか八千穂さんやルイ先生もいる。このさい聞いておこう。

「君たちは墓地へ行くつもりなのかい？夜の森は危ないし、あそこに踏み入れるのはやめた方がいい」

「ああ、ご忠告ありがとうございます。皆守にも耳にタコが出来るぐらい言われているから」

「そう……」

「ありがとう取手くん！心配してくれるのは嬉しいけど……」

「うッうう」

痛い。痛い。この痛みはどうしたら治る？

ああそうか、墓に入ろうとするやつらを排除すればいいんだ。

「保健室へ行くか？」

「いいえ……大丈夫です」

「具合が悪くなったら、いつでも私たちに言ってよ！保健室につれていってあげるからさ」

「君たちでは僕を救う事は出来ないよ」

八千穂さんは、少し驚いた顔をしている。

「僕の場合はルイ先生から聞けばいいよ。それを聞いたら、きっと僕に関わろうとしなくなりますから……それじゃ、僕は行くところがあるから……いや、いかなきゃ」

彼らと別れて

僕はあの場所……墓地へと向かった。

緋勇龍麻との出会い 取手鎌治の場合（後書き）

おお！！なんか進んだけど、不完全燃焼！！文章作るのが苦手なんですよね。

補完になっているのか？と思いつつ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7190r/>

黄龍妖魔学園 黄色い龍は強かった

2011年10月8日22時05分発行